

## ラベル付けの相対的普遍性：第一言語獲得からの示唆\*

村杉 恵子

### 1. はじめに

ヒトは、なぜ生後わずか数年の間に母語を獲得するのだろうか。普遍文法（UG）がヒトに賦与された生得的知識であると考えられるにもかかわらず、母語獲得の途上において幼児の「誤用」が観察されるのはなぜだろう。

これらの問いは、大人の文法と幼児言語の文法の双方の視点から検討を重ねることによって、その答えの導き出される場合がある。生成文法理論は、大人の文法と幼児の言語獲得を対照言語学的に探ることにより、言語間の相違と相同に関する示唆が得られ、精緻化されることがある。本章は、大人の文法の特性と言語獲得途上にみられる「誤用」について考察することによって、極小主義理論に対して第一言語獲得の貢献できるところについて考えてみよう。

---

\*本研究は 国立国語研究所共同研究プロジェクト（「日本語から生成文法理論へ」）のメンバーをはじめ、南山大学言語学研究センターならびに慶応大学言語文化研究所との共催ワークショップ参加者から多くの示唆を得ている。本章は Murasugi (in press)の議論の基礎となる部分を解説するものであるが、詳細や本稿で扱えなかった可能性については Murasugi (in press)を参照されたい。また、本研究の基礎には Amritavalli 氏, Mona Anderson 氏, Željko Bošković 氏, Maria Guasti 氏, Jayaseelan 氏, Jonah Lin 氏, Diane Lillo-Martin 氏, William Snyder 氏, Dylan Tsai 氏, Ian Roberts 氏, Luigi Rizzi 氏, Ken Wexler 氏, 川村知子氏, 岸本秀樹氏, 齋藤衛氏, 澤田尚子氏, 杉崎鉦司氏, 多田浩章氏, 高野祐二氏, 高橋大厚氏, 瀧田健介氏, 天満美智子氏, 中村捷氏, 中谷友美氏, 富士千里氏などから得た意義深い示唆と議論がある。また、本章について、齋藤衛氏、杉崎鉦司、瀧田健介氏、匿名の査読者から重要な示唆をいただいている。ここに、深く感謝する。本研究は科学研究助成金（# 17K02752）ならびに南山大学パッへ研究奨励金 I-A-2（2019-2020）によっても援助を受けている。記してここに感謝する。

## 2. 普遍文法としての「併合」と「ラベル付け」

極小主義理論において,ヒトには文法知識(普遍文法(UG))として併合 (merge) とラベル付け (labeling)が生得的に与えられていると仮定されている. Chomsky (2013)は(1)のようなラベル付けのアルゴリズムを提案している.

- (1) a.  $\alpha$  determines the label of  $\gamma = \{\alpha, \beta\}$  if
- (i)  $\alpha$  is head and  $\beta$  is a phrase or
  - (ii)  $\gamma$  fully contains  $\alpha$  but not  $\beta$ .
- b. The label of  $\gamma = \{\alpha, \beta\}$  is  $\langle F, F \rangle$  if
- $\alpha, \beta$  are both phrases and their heads share a significant feature F.

併合はラベル付けを, ラベル付けは  $\varphi$  素性一致 ( $\varphi$ -feature agreement)等を, そして  $\varphi$  素性一致は格を要求する.

- (2) Merge  $\rightarrow$  Labeling  $\rightarrow$   $\varphi$ -feature agreement  $\rightarrow$  Case  
(Saito (2016))

ここで「 $\rightarrow$ 」は要求することを意味している.(2)は, $\alpha$  と  $\beta$  が併合するためには, ラベル付けが必要であり, ラベル付けがなされるためには,  $\varphi$  素性等の一致が必要であり,  $\varphi$  素性の一致をするためには格が必要となることを示すアルゴリズムである.

Chomsky (2013) の提唱するラベル付けのメカニズムは,  $\varphi$  素性等の一致により可能になることから,  $\varphi$  素性の一致は,ラベル付けにおいては不可欠となる. Chomsky (2013)によれば,英語の時制句 ( $\{DP, TP\}$ ) は, D と T が  $\varphi$  素性を共有することから,  $\langle \varphi, \varphi \rangle$  としてラベル付けされる.

では  $\varphi$  素性一致を持たない日本語のような言語については,併合と構成素のラベル付けはどのようになされるのだろうか.

英語等の多くの言語には,日本語とは異なる  $\varphi$  素性などの一致の仕

組みがある。齋藤 (2013)ならびに Saito (2016) は、文法格や空項、そして複合動詞を豊かにもつ日本語のような言語においては (3) に示されるような多重主語やスクランブリングのような併合が許されることに注目する。そこで問われているのは、本来、併合は自由である。では多重主語やスクランブリングが限られた言語にのみ許されるのはなぜなのかという問題である。

- (3) a. 文明国が 男性が 平均寿命が 短い  
b. その本を 太郎が      買った (こと)

多重主語やスクランブリングが限られた言語にのみ許されるのはなぜなのか。この「なぜ」に対する答えとして、齋藤 (2013)ならびに Saito (2016) は、形態格とも称される文法格 (suffixal Case) がラベル付けのアルゴリズムにおいて重要な役割を果たすためであると提案している。その具体的な提案は(4)に示すようなものである。

- (4) 日本語の格助詞と後置詞には反ラベル付けの特性がある。<sup>1</sup>

Saito (2016)によれば、(5)に示すように  $\alpha P$  が文法格を与えられている場合には  $\beta P$  がその構成素のラベル付けをする。

- (5)  $\gamma = \{\alpha P\text{-Case}, \beta P\}$ , where Case is suffixal.

日本語のような言語においては、 $\{DP, TP\}$  は  $\{DP\text{-NOM}, TP\}$  という構造を担うが、ここでの文法格 (-NOM) にはラベル付けをするための構成素を不可視化する反ラベル付けの特性が備わっていることから、 $\{DP\text{-NOM}, TP\}$  の構造は、TP としてラベル付けされうる。そのため、日本語のような言語には多重主語やスクランブリングが許されるというものである。

すなわち、言語のタイプを分けるこの相違は、Saito (2016)によれ

---

<sup>1</sup> 反ラベル付けの特性については、本書 (齋藤, 高野, 奥等) を参照されたい。

ば、日本語のような文法格の豊かな言語においては、この反ラベル付けの特性がラベル付けにおいて重要な役割を果たすがゆえに、多重主語やスクランブリングなどの併合が可能になるという(詳細は齋藤(2013), Saito (2016) ならびに本書(齋藤,高野,多田,奥等)を参照されたい.)。

この仮説は、UGとしての「併合」と「ラベル付け」の普遍性が、言語にすべからず共通する絶対的な性質を担うのか、あるいは相対的なものなのかを同定するために重要な示唆を与える。ラベル付けのメカニズムにある言語間変異が、スクランブリング操作や多重主語の有無に説明を与えるとすれば、少なくとも大人の文法にある異なり方には自然な説明が与えられる。「併合」が絶対的普遍的な操作である。一方で、「ラベル付け」は相対的普遍性を担い、そこにはいわゆるパラメーターが存在すると考えることができる。

ではその変異性は言語獲得においてどのようにあらわれるのだろうか。Murasugi (in press) は、1歳から2歳前後の幼児言語に広く観察される(疑似)主節不定詞現象、主格以外の格の標示された(誤った)主語、また英語を母語とする幼児の発話に観察される(誤った)「スクランブリング」文といった言語獲得における中間段階の特徴が、Saito (2016)の反ラベル付け仮説とラベル付けの相対的普遍性を支持する証拠となる可能性を示唆している。この提案は極小主義理論で提案されている「ラベル付け」には、(4)ならび(5)に示した反ラベル付けの特性の有無に関して変異性があり、それが言語獲得の中間段階にみられる「誤用」からも支持される可能性について論じている。

本稿では、幼児の「誤用」が相対的普遍性を担う文法特性に拠し、ラベル付けのメカニズムにある相対的普遍性が、言語間の相違と幼児の言語獲得の中間段階との両方を統一的に説明しうるとする仮説を概説し、ラベル付けのアルゴリズムと極小主義理論、ならびに言語獲得のプロセスに与える示唆について考えることにしよう。

### 3. 2歳前後の幼児の文法

#### 3.1. 早期に獲得される主要部の併合

言語学は,人間の心(脳)とことばの仕組みについて,理論と実証の両面から探る自然科学でもある. 理論言語学のみならず言語獲得もまた,科学の常として,その研究史は「不思議」の積み重ねによって動機づけられている.

1960年代以来,第一言語獲得研究の中で広く認められている「不思議」の1つに,二語文という早期の段階において,既に母語の語順が固定されているという観察事実がある.たとえば大久保(1967:33)は,英語を獲得する幼児の最初期の文法について提唱された「軸と開放」の関係(Brain(1963))が幼児日本語においても観察されると記述している.

- (6) a.       there book  
      b.       give candy  
      c.       Bambi go  
      d.       big boat  
      e.       no wet  
      f.       no wash
- (7) a.       おうち   ここ  
      b.       あめ   ちょうだい  
      c.       ぶーん   いったもん  
      d.       おおきい   バス  
      e.       おいちい   ない  
      f.       かえろ   ない

(6),(7)にみるように,場所や存在に関する要素,「目的語」,「主語」,形容詞に修飾される名詞(句),否定辞などを含む表現において,その音声化された語順には,母語の(大人の)語順との齟齬は見られない.この事実は,二語文の段階で,既に,英語では前置された要素が,日本語では後置された要素が,それぞれ(「軸」として)固定される一方,もう片方の場所にはさまざまな要素が「開放」群としてあらわれることを示している.

この観察は、後に、多くの「軸」は基本的には主要部であり、「開放群」は補部であるとして捉えなおされる。そして Wexler (1998)によって、主要部に関するパラメーターの母語の値が言語獲得のきわめて早期の段階で定められると提案されるに至る。最初期に設定されるパラメーター (Very Early Parameter Setting (VEPS)) の仮説の下で、Wexler (1998)は主要部パラメーターの母語の値が言語獲得のきわめて早期の段階で定められると説明している。<sup>2</sup>

Wexler (1998)による VEPS 仮説を、現代の極小主義理論の下で再解釈するとすれば、それは(1)で示したラベル付けアルゴリズムのうち、(8)にみる主要部とその補部を含む句のラベル付けが、観察されうる極めて早期の段階に獲得されるとして捉えられる。<sup>3</sup>

(8) If  $\gamma = \{H, YP\}$ , then H provides the label of  $\gamma$ .

このように考えると、極小主義理論において解決されるべき問題は、 $\gamma = \{XP, YP\}$ のラベル付けを、幼児はいつどのように獲得するのかということになる。幼児は母語のラベル付けのメカニズムをいつどのように、そしてなぜ、獲得することができるのだろうか。

### 3.2. (疑似) 主節不定詞現象

幼児の語順が当該の大人の文法と本質的に齟齬のない二語文から2歳前後の頃まで、(疑似) 主節不定詞現象と称される「不思議」な言語獲得段階が、多くの幼児言語において広くみとめられている。<sup>4</sup> 言語獲得における主節不定詞とは、時制などの「一致」を伴わない動

---

<sup>2</sup> Weissenborn (1990), Pierce (1992), Poeppel and Wexler (1993)なども参照されたい。

<sup>3</sup> 厳密には主要部—XPにおいてラベル付けが可能であることと、語順が決められることは独立している。しかし、その関連性は、ラベル付けが統辞体間の線的順序を決定するために必要とされるとする Takita (in press)の仮説によって裏付けられるという指摘を匿名査読者から受けている。ここに感謝して記す。

<sup>4</sup> 本稿では紙面の都合もありその詳細について記述することができないが、主節不定詞現象については、Harris and Wexler (1996), Hoekstra and Hyams. (1998), Rizzi(1993/1994), Wexler (1994,1998), Schüze and Wexler(1996), Phillips (1887, 1996) など多くの重要な研究がある。

詞が、幼児の発話する主文において観察されることを意味する。主文とは、基本的に動詞が時制を担うことによって成り立つ。しかし、幼児の最初期の動詞は、大人の文法に鑑みたとき時制の一致があらわれない「誤った」形式であることがある。

もし言語が、周囲の大人の文を模倣することによって学習されるのであれば、この現象は極めて異常な現象である。一次言語資料の中にはない（非文法的な）文を、言語にかかわらず幼児が自発的に生成するのはなぜか。（疑似）主節不定詞現象とは、言語獲得が、刺激と反応を繰り返しながら学習される過程であると仮定することによって説明されえないものであることを強く示唆している。

（疑似）主節不定詞は、多くの言語の初期の獲得段階に観察されるが、その形態的な具現化の仕方については言語によって異なっている。（9）に簡単に示すように、フランス語やドイツ語、オランダ語のような言語では主節に不定形があらわれる。一方、語幹が独立できる動詞を持つ言語（英語、スワヒリ語など）では裸動詞が、そして日本語のように動詞が拘束形態素の性質をもつ語幹を持つ言語（韓国語、アラビア語、トルコ語、ルーマニア語など）では一定の活用のみを伴った代理形が典型的に（疑似）主節不定詞としてあらわれる（詳細は Murasugi et al. (2007), Murasugi and Fuji (2008), Murasugi and Fuji (2009), Murasugi et al. (2009), Murasugi, Nakatani, Fuji (2010), Murasugi and Nakatani (2011), Murasugi (2015) などを参照されたい。）「（疑似）」とは、すべての言語において、それが「不定詞 (Infinitives)」の形式であらわされるのではないことを示している。

- (9) a. **Dormir** petit bébé.  
sleep-INF little baby  
'Little baby sleep.' (Daniel, フランス語 : 1;11)
- b. Earst kleine boekje **lezen**.  
first little book read-INF  
'First (I/we) read little book.' (Hein, オランダ語 : 2;0)
- c. Papa **have** it. (Eve, 英語 : 1;06)
- d. あいた (ユウタ, 日本語: 1;06)

- e. mek-e                      emma  
eat-Declarative Mommy (韓国語 : 2;02-2;03)  
'Let's eat, Mommy.'

幼児の時制を欠いた動詞の形式には,当該言語の形態的特徴が色濃く反映される. このことは, わずか 1 歳後半の幼児でも, 母語の語順のみならず, 動詞の形態的な特徴をも既に獲得していることを示している. したがって, 動詞の形態的特徴についての知識も VEPS の一部であると考えられる(Murasugi (2015)).

さて, (疑似)主節不定詞が発話される時期の幼児の文法には, 動詞の不定性以外にも, (10)に示すような共通する特徴がみとめられる. 以下は Deen (2002)の一般化を基礎とした (疑似) 主節不定詞に関する形態的統語的な特徴である.

- (10) a. 主節不定詞は主文に不定形があらわれる.  
b. 主節不定詞の段階では, 時制や補文標識に関する要素 (時制に関する一致や活用, 大人と同様の格付与など) は観察されない.  
c. 主節不定詞は, 継続相をあらわすことがある.  
d. 主節不定詞は, (希望, 命令などの) モーダルをあらわすことがある.  
e. 主節不定詞と共起する「主語」は, 音声的に空か, 名詞句に誤った格が付与されるか, あるいは文頭ではない場所にあらわれる.

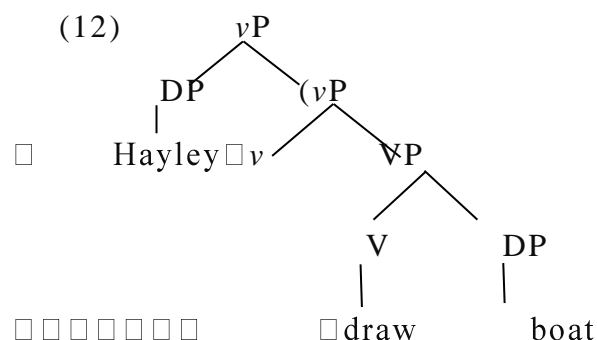
では, この言語獲得にみられる不思議な中間段階は, ラベル付けに関してどのような示唆を与えるのか. まず, 日本語と英語の主節不定詞現象を中心に整理してみよう. (11) は, Galasso (1999)に引用される Radford (1990)の例である.

- (11) a.            Adult: What did you draw?  
                  Child: Hayley draw boat (1;08)



- b. Adult: What did you do in your new bed?  
Child: Jem get in (1;08)
- c. ( $\varnothing$ ) Kick ball (1;10)
- d. Me kick (2;06)
- e. Daddy go (1;10)

Radford (1990)は、幼児の初期の発話は機能範疇を欠き、そこには時制などの屈折が見られず、大人の文法における小節のような構造をもつと提案している。小節仮説と称される提案において、幼児の文構造は、以下のようなものであるとされている。<sup>5</sup>



このような構造においてラベル付けはなされているのか、もしそうならば、どのようになされているのだろうか。

(10)に示された特徴は、日本語や韓国語の疑似主節不定詞の時期においても観察される。たとえば「おしっこ」を意味するミメティックス表現「シー(チー)」は、(13b)のように「た」を伴って過去の出来事を意味するだけではなく、(10d)のモーダルの特徴ををあらわすことがある。それは(13d)のような「ちょうだい」を伴う表現を経て、大人の形式へと移行していく。

- (13)a. シー (スミハレ, 日本語 : 1;02)
- b. シーた (スミハレ, 日本語 : 1;05)

<sup>5</sup> 本論文の導き出す提案のもとでは、(12)における vP といったラベルは便宜的なものである。

- c. ちーしたな (スミハレ, 日本語 : 1;07)
- d. ちー ちょうだい (スミハレ, 日本語 : 1;09)

(13a)–(13d)は,それぞれ,「おしっこをする」「おしっこをした」「おしっこをしたい」「おしっこをさせてほしい」といった幼児の意図を表している.

一般的に, 幼児がなにを意図して発話しているのかについては, コーパスのみからはわかりにくいことがある. しかし, おしっこをしたのか, あるいはおしっこをしたいのかについての幼児の意図は, 発話の状況さえ明確でありさえすれば, 幼い時期の発話についても分析の対象となりうる. とりわけ野地(1973-1977)は, 丁寧に発話の背景や状況を記述しており, モーダルの意味として「た」形であらわされる疑似主節不定詞現象に関して, 重要な証拠を残している.

この疑似不定詞現象の時期には, (10)にみたように, 時制や補文標識に関連した特徴が大人の文法とは異なることが指摘されているが, 幼児日本語においても, 格助詞や動詞に時制に関する複数の活用が観察されないといった特徴がある.

野地(1973-1977)の記録した幼児 (スミハレ) の発話を例にとり, 非対格動詞「来る」に関わる文の獲得の過程を辿ってみよう. 1歳6か月から10か月までの「来る」の活用は「来た」(「た」形)が用いられる. このとき主語は随意的に発話にあらわれるが, そこには主格標示は観察されない.

- (14) a. きた きた きた (スミハレ, 日本語 : 1;06)
- b. りんりん きた (スミハレ, 日本語 : 1;06)
- c. リンゴ きた (スミハレ, 日本語 : 1;06)
- d. わんわん キタ かあちゃん(スミハレ, 日本語 : 1;10)
- e. xxx が きたよ. くるよ. (スミハレ, 日本語 : 2;0)
- f. わかめ わかめおじちゃんが くる  
(スミハレ, 日本語 : 2;01)

(14a) – (14f)は,それぞれ,「自転車が来る」「(スミハレ自身が自転車

が来るのをみて逃げようとして) リンリン (自転車) が来た」「リンゴ (売り) が来た」「犬が (ここに) 来た,お母さん」「何か(意図の対象が不明のため xxx としてあらわされている)が来ているよ」「わかめ売りのおじさんが来ている」と言った内容が意図されている.これらの例からわかるように, スミハレの発話に主格が生産的にあらわるようになる時期は2歳頃であり,その時には過去形 (疑似主節不定詞の形式)「来た」以外に現在形の「来る」も生産的に観察される.この相関は,時制が主格を付与すると考えると自然に説明される.<sup>6</sup>

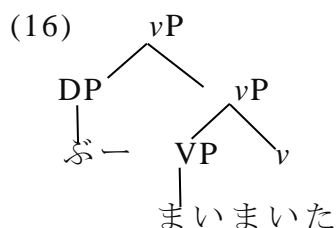
同様の相関的な特徴は,スミハレの自然発話に多く観察される.

(15) a. ぶー まいまいた (スミハレ, 日本語: 1;10)

b. あかちゃん,めめった (スミハレ, 日本語: 1;10)

(15a)と(15b)は,それぞれ,「ぶー (飛行機) が飛んでいる」「赤ちゃんが眼を開けた」という意味を意図された発話であるが,このとき,「た」形であらわされる動詞の主語に格標示はない.<sup>7</sup>

以上のような議論に立ち, Murasugi (in press)は,疑似主節不定詞を含む(15a)の可能な構造として,(16)のようなものを提案している.



ここでも問題となるのは,格標示のない疑似主節不定詞の時期において,はたして構造全体にラベル付けがなされているのか否かである.

<sup>6</sup> 大久保(1967)は,二語文の段階の名詞句には文法格が与えられておらず,2歳を過ぎてから一貫した格付与が見られると解釈される報告をしている.

<sup>7</sup> 幼児韓国語について, Kim and Phillips (1998)も(9e)に例示したような接辞 *e* を伴う動詞のみが疑似主節不定詞としてあらわれる2歳の頃,動詞や形容詞の時制に関する活用も,主格も観察されないと報告している.日本語と韓国語の幼児言語の特徴は,時制に関する動詞の活用の多様性が見られない段階で,主格が与えられないという点においても合致している.

もしラベル付けがなされているのならば,それはどのようになされているのか.

### 3.3. なぜ疑似不定詞現象が在るのか

(疑似)主節不定詞についてのラベル付けのメカニズムを考察するために,その言語獲得段階の統語的特性についてみてみよう.幼児の(疑似)不定詞現象はなぜあるのか.そしてそれはいつまで続くのか.

Murasugi (2009, 2015), Murasugi and Fuji (2009), Murasugi, Fuji and Hashimoto(2007)などは, 幼児言語の(疑似)主節不定詞現象には 2つの段階があることを示唆している.

日本語のような動詞語幹が独立できない言語においては,1 歳代の疑似主節不定詞とは,発話されるすべての動詞が一定の代理形式(たとえば「-た」形,ミメティックス)を伴って表れ,このとき,格標示のみならず wh 疑問文も,疑似主節不定詞とは共起しない.ところが 2 歳前後になると, 幼児は大人の動詞形と同様の活用を発話し始める.すなわち日本語の疑似主節不定詞は,1 歳後半頃の時期に観察されるが,2 歳前後には,幼児の動詞の活用は豊かになり,この頃,主格や目的格などが顕在化するようになる.

一方,英語を母語とする幼児は,2 歳を過ぎてもなお,主節の動詞として,時に不定形を,時に大人と同様の定形動詞を,随意的に用いる.このとき,主節内に随意的に定形動詞があらわれることから,この時期の主節不定詞については随意的不定詞(Optional Infinitive)と称される場合がある.この随意的な不定詞現象は,Sano (1995)の述べるように,少なくとも動詞の活用形としては 2 歳以降の幼児日本語には観察されない.

実は,主節不定詞現象の段階について Galasso (2001)は興味深い提案をしている.それは, 機能範疇の獲得には二段階あり,それに伴い(疑似)主節不定詞現象においても二段階が存在するというものである.この 2つの段階は,上述した日本語の段階と同質のものである可能性が高いが,Galasso (2001)によれば,英語における最初の段階は機能範疇が欠如している段階であり,それが Radford (1990)の提案する

小節仮説の説明する段階に相当する。そして二段階目は、先に述べた随意的不定形と称されるものである。この段階においては幼児の発話する主文内において(大人の文法と同様の)時制を伴った定型動詞と、(誤った)不定形の動詞のいずれもが随意的に表れる。例えば英語においては(17)のような不定形が幼児の発話に観察される。

- (17) a. That go in there  
b. Daddy going to the shops  
c. Mummy gone to work

そして(疑似)主節不定詞現象の終焉に近づく頃、主語名詞句に「誤って」主格以外の格が付与されるという点において、日英語は共通した特徴を示す。

- (18) a. Her haven't got her glasses (2;09) (Huxley (1970))  
b. もこちゃん\*の 牛乳\*の ほしいんだってさ  
(もこちゃんが牛乳が欲しいんだってさ.) (もこ:2;00)  
(Sawada, Murasugi and Fuji (2010))

(疑似)主節不定詞の頃に、格の誤用が観察されることは、既に(10)においても指摘したところであるが、では(随意的に)文に時制を投射する時期(主節不定詞現象も終焉しようとする時期)になぜこういった「誤った」格の付与された主語が観察されるのだろうか。

主節不定詞と格の関係について、Schüze and Wexler(1996)は一致・時制欠如に関する仮説(Agreement/Tense Omission Model (ATOM))を提唱している。それによれば随意的不定詞の表れる時期とは、( $\phi$ 素性を含む)時制の素性の未指定(“underspecified”)である段階であるとしている。英語を母語とする幼児の発話において、主節の動詞が定形動詞の場合には、大人の文法と同様に主語の名詞句に主格が与えられる。一方、主節に不定詞があらわれるときには、主語の名詞句には主格以外の格が標示される。ATOM仮説は、2歳頃の幼児が、時に主語に主格ではない格(*me, my, him, her*など)を標示することのある

幼児言語に広く観察される経験的事実に説明を与えうる。<sup>8</sup>

- (19)a. My go in there
- b. Me went home
- c. Him going to the shops
- d. Her gone to work

ATOM 仮説によれば,(18a)や(19)のような例は, (疑似) 主節不定詞が随意的にあらわれる時期において,時制のもつ $\phi$ 素性が大人のそれとは異なる方法で指定されていることを示している. 定形動詞はVP内から時制へと上昇する. 一方, 非定形動詞は上昇しない.この時, 主格の標示されるべき主語は(大人の文法では許されない)属格や与格などを伴って表れる.たとえば時制句の主要部が[-agreement, -tense]の素性を持つ場合には属格主語が, [-agreement, +tense]の場合には与格主語が表れる. この仮説に基づけば, 主節不定詞の段階とは, $\Phi$ 素性を含む時制の素性が未指定である段階であり,その時幼児は大人の文法とは異なる文法をもつ.それが故に, 文の主語名詞句が, 主格ではない「誤った」格を伴う(たとえば\**My do it* ,\**Me want it* などのような)文を, 幼児は自発的に産出すると考えられる.

#### 4. 幼児文法が極小主義理論に示唆するところ

##### 4.1. ラベル付けの相対的普遍性

3.3.節で紹介した ATOM 仮説は, 極小主義理論の下では, どのように考えることができるのか.

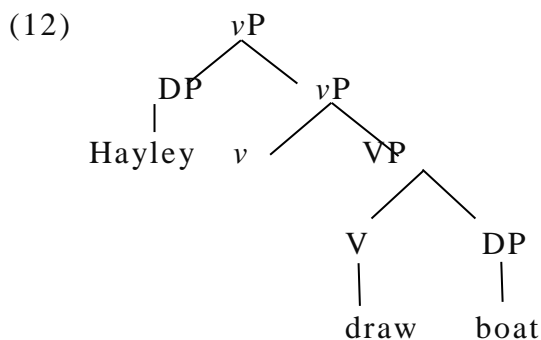
仮に Galasso (1999)の述べるように, 2歳頃までは時制などの一致が観察されない小節構造を担う(疑似)主節不定詞であり, 2歳過ぎ

---

<sup>8</sup> Gruber (1967), Brown (1973), Rispoli (1994), Wexler (1998)なども参照されたい.

頃は随意的不定詞であるという提案が正しいとしても、ATOM 仮説の洞察は重要な示唆を与える。ATOM 仮説の神髄は、幼児の言語獲得の中間段階には  $\phi$  素性を含む時制の素性が未だ指定されていない段階があると示唆するものであるからである。そしてこの洞察は、極小主義理論の下では、幼児が母語を獲得する中間段階に（母語の大人の文法に相当する） $\phi$  素性一致の仕組みについて、未獲得な段階が幼児の文法に存在すると捉えなおすことができる。

では、未指定の  $\phi$  素性を仮定している幼児は、（疑似）主節不定詞を含む節を、大人と同様に  $\langle \phi, \phi \rangle$  としてラベル付けをしているのだろうか。この疑問に答えるために、まず、もう一度、典型的な幼児の初期の構造について、英語を例にとって考えてみよう。



仮に、この時期の幼児の発話する文に大人と同質のラベル付けがなされているとしよう。幼児のラベル付けが、大人の文法のそれと同質なのであれば、 $\phi$  素性の一致 ( $\phi$ -feature agreement) は、UG として人間言語にすべからず備わっていることになる。しかし、実際には世界の言語には  $\phi$  素性一致を欠く言語がある。この事実を鑑みれば、 $\phi$  素性一致が、少なくとも絶対的普遍性を担う UG の一部であると仮定するには問題が生ずることになる。

更に、ラベル付けの仕組みが絶対的普遍性を担うとは考えにくい根拠は第一言語獲得研究からも得られる。（疑似）主節不定詞現象とは独立に、言語獲得途上のラベル付けの仕組みが大人と同質のものとは考えにくいと考えられる現象が観察される。たとえば英語を獲得する幼児の 2 歳頃の発話において、主語が空であらわれるとき、目的語が（あたかもスクランブリングされたように）文頭にあらわれるので

ある.

Radford (1990)は, Bowerman (1973)を引用し, 1歳の終わりの頃の幼児の発話には, (20)に示すように動詞—目的語の語順のみならず,(21)に示すように目的語—動詞の語順を産出することがあることを指摘している.

- |        |                      |             |
|--------|----------------------|-------------|
| (20)a. | Look Kendall (VO)    | (1;10-1;11) |
|        | ‘Look at Kendall’    |             |
| b.     | Writing book (VO)    | (1;10-1;11) |
| c.     | Break Fur-Book (VO)  | (1;10-1;11) |
|        | name of book         |             |
| d.     | Bite...finger        | (1;10-1;11) |
| (21)a. | Doggie sew (OV)      | (1;10-1;11) |
|        | ‘Sew a doggie’       |             |
| b.     | Kimmy kick (OV)      | (1;10-1;11) |
|        | ‘Kick Kimmy’         |             |
| c.     | Kendall pick-up (OV) | (1;10-1;11) |
|        | ‘Pick up Kendall’    |             |
| d.     | Doggie lookit (OV)   | (1;10-1;11) |
|        | ‘Look at the doggie’ |             |

たとえば,(21b)は,「Kimmy を蹴る」と意図された発話であるが, このとき *Kimmy* が動詞 *kick* に前置している.同様の語順は, 主語や補部のある場合にも観察される.Radford (1990: 249)によると, 主語—動詞—目的語(例: *Mommy... sew doggie*)の例にみるように母語の語順が幼児の発話に観察される一方で, 母語とは異なる語順として目的語—動詞—主語 (*Mommy hit Kendall*, 意図された意味は ‘*Kendall hit Mommy*’)もまた,観察されるというのである.

実際, 英語を母語とする幼児の 1歳後半から 1歳頃にかけて,目的



語—動詞の(大人とは異なる)語順は広く観察される場所である。<sup>9</sup>

- (22) a. book read (“read book’を意図して) (Susan 1;10)  
(Miller and Ervin (1964))
- b. Balloon throw (‘throw baloon’ を意図して)  
(Gia 1;07) (Bloom (1970):86)
- c. Paper find (‘find paper’を意図して) (Adam 2;03)  
(Brown et al. (1968))
- d. Paper write (‘write paper’を意図して) (Adam 2;03)  
(Brown et al.(1968))
- e. Pencil put mouth (‘Put pencil in mouth’ を意図して)  
(Adam 2;04) (CHILDS: BROWN:aDAM03;CHA)
- f. Door push in (‘push door in’Mommy’) (CHI 1;08)  
(CHILDS:VALIAN:04C;CHA)
- g. Kimmy change here (‘chage Kimmy here’ (Kendall 1;11)  
(CHILDES: BRAIN:KENDALL1. CHA)

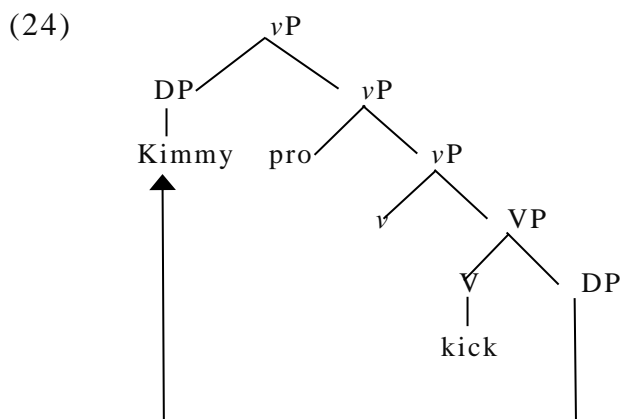
当該の幼児文法において主要部パラメターの値が早期に確定している事実と考え合わせると,上に示されたような「スクランブリング」の発話の不思議さはさらに際立つことになる。Radford (1990:70-72)によれば,機能範疇が観察されない「小節」構造の時期, ちょうど名詞句や動詞句の内部で主要部—補部の語順に「誤り」が観察されないように,前置詞句についても, 幼児はその語順を「誤る」ことはなく、そこには大人の語順との齟齬はない。

- (23) a. Paula play with ball. In there, mummy. Put in there. Go in there.  
Hat on baby.
- b. Paula play with ball. Open box. Go in. Get out.(Paula, 1;06)

---

<sup>9</sup> 幼児英語の「誤った」かき混ぜ文については Price (2000)においても指摘されている。(22e)・(22g)は Koizumi (1999:231)から引用するものであるが,Koizumi(1999)はこの種の語順の「誤用」について,split VP 仮説に基づく説明を試みている。詳細は Murasugi(2019)を参照されたい。

以上のような議論に基づき Murasugi(2019)では,幼児英語においてスクランブリングの見られる段階について,たとえば (21b) の構造は (24)のような構造であると提案している.



主要部パラメーターについては母語の値を決定しており,主要部とその補語の語順について「誤る」ことのない幼児が,その後の段階で,母語において許されない(「誤った」)語順を産出するとすれば,そのとき,目的語は,スクランブリングのような移動操作によって文頭に移動していると考えられる.ただし,この段階において,英語を獲得する幼児に,母語の文法と同質の  $\varphi$  素性一致に関する知識が備わっていると考えすることはできない.なぜならば英語の大人の文法ではスクランブリング操作のような移動は許されないためである.したがって幼児のラベル付けのシステムは母語の大人の文法と同質のものではないことになる.

では,英語を母語とする幼児が「スクランブリング」を操作しているとしたら,当該の時期に生成される文のラベル付けはどのようになされているのだろうか.

この問いに対する答えとして,論理的には少なくとも2つの可能性が考えられうる.1つは(疑似)主節不定詞の段階にある幼児が, $\varphi$ 素性一致に関して(たとえ獲得しようとする言語が $\varphi$ 素性一致を担う言語であったとしても)それを欠く日本語の大人の文法のような値

を仮定しているというものである。この仮説に従えば、英語を獲得する幼児は、(疑似)主節不定詞の段階で、母語の抽象格ではなく、日本語のような文法格の性質をもつ格を仮定しており、その結果として日本語のような「スクランプリング」された文をも生成すると考えることもできる。

しかし、この仮説は、その習得可能性を考えると、却下せざるを得ない。いったん文法格(ならびにそれに付随する反ラベル付けの特性)を仮定した幼児が、その仮定について「間違っている」という判断を、いったいどのようにして、否定情報を用いることもなく、なしうるのか。

ここに残されるもう一つの仮説は、(疑似)主節不定詞の段階においては、未だ母語の{XP, YP}構造のラベル付けの仕組みが獲得されていないというものである。すなわち、(疑似)主節不定詞現象とは、幼児が、獲得しようとする母語の{XP, YP}構造のラベル付けの方法を模索している段階であり、その時に生成される文は、母語のようなラベル付けがなされていないという仮説である。

文がラベル付けされていないとはどういうことか。これを考えるために第2節で概観した極小主義理論の併合とラベル付けに関する大人の文法についてふりかえってみよう。

主要部による主要部—補部({H, XP})のラベル付けはUGの一部と考えられる。併合はUGの一部であるが、併合は、文構造のすべての構成素がラベル付けされることを要求する。しかし、Saito (2016)の提案によれば{XP, YP}構造のラベル付けの方法には言語間変異が存在する。Chomsky (2013)によると、英語の時制句である{DP, TP}は、 $\phi$ 素性の一致によってDとTが $\phi$ 素性を共有し、 $\langle\phi, \phi\rangle$ としてラベル付けされる。一方、{DP, TP}に相当する日本語の{DP-NOM, TP}は、Saito (2016)によれば、文法格(-NOM)が反ラベル付けの特性を担うため、文はTPとしてラベル付けされる。英語と日本語の違いを引き起こす一因は、時制を含む節が異なる方法でラベル付けされる点にある。

この仮説に従えば、ラベル付けに関しては、世界の言語に在る相違を定めるパラメーターが存在し、ラベル付けとは相対的な普遍性を担うUGの一部である。幼児はそれぞれの母語のラベル付けがどのよ

うになされるかについて、一次言語資料をもとにして、習得しなくてはならない。言い換えれば、幼児は、普遍文法によって制限された  $\phi$  素性の一致に関する(普遍文法に制限された)可能性の中から、母語の特性がなんであるかを選択しなくてはならない。幼児は、言語によって多様性が見られる {XP, YP} のラベル付けについて、自身の母語がどのような仕組みを持つのかを肯定情報に基づいて習得しなくてはならないのである。

では、母語のラベル付けの仕組みはいつ決定されるのか。(8)にみたように、「併合」は絶対的普遍性を担う。したがって主要部と補部の構造 ({H, XP}) については、言語獲得のきわめて早期の段階で母語の値が決定される。しかし、「ラベリング」に不可欠な  $\phi$  素性の一致に関わる特性については、ATOM 仮説の洞察にみるように「未指定な」段階が言語獲得の中間段階に存在する。幼児は当該の言語が  $\phi$  素性の一致があるのか否かを含めてラベル付けの仕組みを獲得しなくてはならない。この過程こそが(疑似)主節不定詞現象の観察される時期であると考えられるのではないだろうか。すなわち(疑似)主節不定詞の時期とは、母語のラベル付けのメカニズムを未だに探っている時期であると考えられる。では時制句を含む母語の文構造のラベル付けが獲得されるのはいつなのか。これまでの議論に基づけば、それは、主要部としての時制の仕組みが句構造の中で確立した後、すなわち、(疑似)主節不定詞現象が終焉する時である。

ここに残る最後の問題は、母語と同質のラベル付けができない段階で、(疑似)主節不定詞を含む文は、どのように認可されているのかである。大人のラベル付けのシステムを未だ獲得していない段階で、幼児は「文」をどのように認可しているのだろうか。

この問いについて、Murasugi (in press)は、当該の段階にある幼児の「主部」と「述部」は、トピック(Topic)とコメント(Comment)との関係で「認可」されているという仮説を提案している。

トピックとコメントの関係が幼児の言語獲得において重要な役割を果たすとする仮説は、Hornby (1971)や MacPhinney and Price (1980)をはじめ、言語獲得研究史において多く指摘されてきている。実際、疑

似主節不定詞現象の見られる段階で、日本語においても、話題を標示する助詞「は」は、(25a)に示すように自然発話に表れ、更に、その段階で「ね」や「よ」などの、話者の念押しや断定などを表す文末助詞も、動詞的な要素と共起している。

- (25) a. おとうさんは？ (スミハレ, 日本語 : 1;07)  
b. ふうわ ついたね ね(スミハレ, 日本語 : 1;08)  
c. いっぱい いっぱいになったよ (スミハレ, 日本語 : 1;10)

(25a)–(25c)はそれぞれ、「おとうさんは？」「ろうそくをつけてね」「水でいっぱいになったよ」といった意図で発話されており、野地の記すコンテクストを見る限り、ここでの幼児の談話的な意味付けは、大人のそれと同質であると思われる。DP-vPについても、スクランブリングされた文についても、ラベルが不明なまま、このような談話的要素とともに、述部一項の構造として解釈され、時制を含む命題のラベル付けへと獲得過程は進んでいくのではないだろうか。その過程を動機づけるのは、文の主要部としての時制と、そこにある時制の  $\varphi$  素性の一致と格の仕組みの獲得であり、これを可能にするのは、後天的に得る言語経験によることは言うまでもない。

ラベル付けのメカニズムは言語によって異なる。広く幼児言語に観察されてきた（疑似）主節不定詞の段階とは、言語間に変異性のある {XP, YP} の構造におけるラベル付けのメカニズムが未だ獲得されていない段階である。Saito (2016)によって提唱されたラベル付けに関する言語間変異と反ラベル付けに関する大人の文法についての仮説は、小節仮説や ATOM 仮説などの洞察などに積み重ねられた分析と Bowerman (1973)などによる幼児の発話データをはじめとした言語獲得研究からも支持されるのである。

## 5. まとめにかえて

本書（杉崎）においても言及されているように、UG は母語の獲得

過程と到達点を制約しており、文法の中核的な部分は年齢の低い段階から成人と同質であると考えられる。それにもかかわらず、なぜ幼児は言語環境から「学習した」とは考えにくい形式を、言語獲得の中間段階で生成するのだろうか。

本章は極小主義理論の下で、幼児の併合とラベル付けのメカニズムについて考察した。特に、幼児言語の早期に獲得されている語順と、言語獲得の中間段階にみられる主節不定詞現象や「スクランブリング文」を中心とした「誤用」が、極小主義理論に対して示唆するところについて概観した。本稿で示された分析に基づくとすれば、幼児が併合と母語のラベル付けのしくみを獲得することに時期的な差がある理由は、普遍文法における絶対的普遍性と相対的普遍性に起因することになる。

最後に、幼児文法においてラベル付けアルゴリズムはどのように捉えられうるのかについて議論しておこう。大人の文法については、併合はラベル付けを、ラベル付けは  $\phi$  素性一致 ( $\phi$ -feature agreement) 等を、そして  $\phi$  素性一致は格を要求する。(2)((26)として再掲)は、この提案を概略図式化したものであり、このときの  $\rightarrow$  は、「要求する」意味を担う。

(26) Merge  $\rightarrow$  Labeling  $\rightarrow$   $\phi$ -feature agreement  $\rightarrow$  Case  
(Saito (2016))

一方、言語獲得においては、このような大人の文法がそのままの形で中間段階としてあらわれるわけではないようである。主要部とその補部を含む句のラベル付けと線状化は早期で獲得されるものの、格と  $\phi$  素性の一致については、その獲得に時間を要する。その発達は概略以下のようなものであろう。ここでの「 $\rightarrow$ 」は、(2)ならびに(26)で用いた「要求する」という意味ではなく、時系列に沿った順序を示している。

(27) {Labeling  $\gamma = \{H, YP\}$   $\cdot$  Merge}  $\rightarrow$  { $\phi$ -feature agreement  $\cdot$  Case  $\cdot$  Merge}  $\rightarrow$  {Labeling  $\gamma = \{XP, YP\}$   $\cdot$  Merge}

これを「(当該の仕組みが) 獲得されるために要求する」という意味で「→」を用いて捉えなおすとすれば,言語獲得の視点からみたラベル付けのアルゴリズムは以下のようなようになるかもしれない.

(28) {Labeling  $\gamma = \{XP, YP\} \cdot \text{Merge}$ } → { $\phi$ -feature agreement · Case · Merge} → {Labeling  $\gamma = \{H, YP\} \cdot \text{Merge}$ }

ここに示唆されるのは,母語獲得において,{XP, YP}のラベル付けをするためには, $\phi$ 素性の一致と格に関する知識が必要であり,その過程において,{H, YP}のラベル付けは獲得されている必要があるという言語獲得モデルである.

言語獲得の研究史上,長期間にわたり,不思議な現象として広く知られてきた(疑似)主節不定詞現象とは,極小主義理論の下では母語の $\phi$ 素性の一致と格のメカニズムについて未獲得である時期であり,未だラベリングの仕組みの獲得されていないが故にに産出される「誤用」とであると説明される. すなわち,(疑似)主節不定詞現象とは,反ラベル付けの特性のメカニズムなどの母語のラベル付けの仕組みについて幼児が模索する段階である. それは, Saito (2016)の提案するように,ラベル付けのメカニズムには言語間変異が在るためであろう. ラベル付けは相対的に普遍的なUGであり,ヒトの文法獲得に時間を要する中核的な部分は,母語のラベル付けの仕組みを獲得することにあるのではないだろうか.

## 参考文献

- Bloom, Lois (1970) *Language Development: Form and Function in Emerging Grammars*. Cambridge, MIT Press, Boston.
- Bowerman, Melissa (1973) “Structural Relationships in Children’s Utterances: Semantic or Syntactic?” *Cognitive development and the acquisition of language*, 197-213. Academic Press, New York.
- Braine, Martin (1963) “The Ontogeny of English Phrase Structure: The First Phase,” *Language* 39. 1-14.

- Brown, Roger (1973) *A First Language: The Early Stage*. Harvard University Press, Cambridge, MA.
- Brown, Roger, Courtney Cazden and Ursula Bellugi-Klima (1968) "The Child's Grammar from I to III," *Minnesota Symposia on Child Psychology: Volume 2*, 28-73. University of Minnesota Press, Minneapolis.
- Chomsky, Noam (2013) "Problems of projection," *Lingua* 130. 33-49.
- Deen, Kamil (2002) *The Omission of Inflection Prefixes in the Acquisition of Nairobi Swahili*. UCLA dissertation, Los Angeles.
- Galasso, Joseph (1999) *The Acquisition of Functional Categories: A Case Study*. University of Essex dissertation, Colchester, UK.
- Galasso, Joseph (2001) "Verbs and Nouns: INFL and the Emergence of DP," ms. California State University, Northridge.
- Gruber, Jeffrey, S (1967) "Topicalization in Child Language," *Foundations of Language* 3. 37-65.
- Harris, Tony and Kenneth Wexler (1996) "The Optional-Infinitive Stage in Child English," *Generative Perspectives in Language Acquisition*, 1-42. Philadelphia: John Benjamins.
- Hoekstra, Teun and Nina Hyams (1998) "Aspects of Root Infinitives," *Lingua* 106. 91-112.
- Hornby, Peter (1971) "Surface Structure and the Topic-Comment Distinction: A Development Study." *Child Development* 42. 1975-1988.
- Huxley, Renira (1970) "The Development of the Correct Use of Subject Personal Pronouns in Two Children," *Advances in psycholinguistics*, ed. by Giovanni B. Flores d'Arcais and Willem J. M. Levelt, 141-165, North-Holland Publishing Company, Amsterdam.
- Kim, Meesook and Colin Phillips (1998) "Complex Verb Construction in Child Korean: Overt Markers of Covert Functional Structure," *Boston University Conference on Language Development* 22. 430-441.
- Koizumi, Masatoshi (1999) "Object Shift in Early Child English," *Proceedings of the Nanzan GLOW*. 231-237. Nanzan, Nagoya.
- MacWhinney, Brian. 1995. *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk* (second edition). Lawrence Erlbaum, Hillsdale, NJ.



- MacWhinney, Brian and Derek Price (1980) "The Development of the Comprehension of Topic-Comment Marking," *Proceedings of the first international congress of the study of child language*.1-13. Lanham, MD: University Press of America.
- Miller, Wick and Susan Ervin (1964) "The Development of Grammar in Child Language," *The Acquisition of Language, Monographs of the Society for Research in Child Development* 29-1. 9-34.
- Miyahara, Kazuko and Hidekazu Miyahara (1973) "First Phrase of the Grammatical Development in a Japanese Child," *Proceedings of the 37<sup>th</sup> Annual Convention of the Japanese Psychological Association*, 349-350. Tokyo.
- Murasugi, Keiko (2015) "Root Infinitive Analogues in Child Japanese," *Handbook of Japanese Psycholinguistics*, 117-147. De Gruyter Mouton, Berlin.
- Murasugi, Keiko (in press) "Parameterization in Labeling: Evidence from Child Language," *The Linguistic Review*, De Gruyter, Berlin.
- Murasugi, Keiko and Chisato Fuji (2008) "Root Infinitives: The Parallel Routes the Japanese- and Korean- Speaking Children Step in." Paper presented at Japanese/Korean Linguistic Conference 18, City University of New York, 13 November. (Paper appeared in *Japanese/Korean Linguistics* 19, 2011, 527-541. Center for the Study of Language and Information, Stanford)
- Murasugi, Keiko and Chisato Fuji (2009) "Root Infinitives in Japanese and the Late Acquisition of Head-Movement," *BUCLD 33* supplement. <http://www.bu.edu/buclid/proceedings/supplement/vol33/>
- Murasugi, Keiko, Chisato Fuji and Tomoko Hashimoto (2007) "What's Acquired Later in an Agglutinative language. Paper presented at Asian GLOW VI, Chinese University of Hong Kong, 27 December.
- Murasugi, Keiko, Tomomi Nakatani and Chisato Fuji (2009) "The Roots of Root Infinitive Analogues: The Surrogate Verb Forms Common in Adult and Child Grammars." Poster presented at the 34<sup>th</sup> Annual Boston University Conference on Language Development (BUCLD), Boston University, 7 November. (Paper appeared in the *Boston University Conference on Language Development 34 Proceedings Online Supplement*, 2010.)
- 野地潤家. 1973-1977. 『幼児言語の生活の実態 I~IV』文化評論出版, 東京.

- 大久保愛. 1967. 『幼児言葉の発達』 東京堂書店, 東京.
- Phillips, Colin (1995) "Syntax at Age Two: Cross-linguistic Differences," *Papers on language processing and acquisition, MIT Working Papers in Linguistics* 26. 325-382. Boston.
- Phillips, Colin (1996) "Root Infinitives Fre finite," *Proceedings of the 20<sup>th</sup> annual Boston university conference on language development (BUCLD 20)*. 588-599. .
- Pierce, Amy (1992) *Language acquisition and syntactic theory: A comparative analysis of French and English child grammar*. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Poeppel, David and Kenneth Wexler (1993) "The full competence hypothesis of clause structure in early German," *Language* 69. 1-33.
- Powers, Susan (2000) "Scrambling in the Acquisition of English?" *The Acquisition of Scrambling and Cliticization*, ed. by Susan Powers and Cornelia Hamann, 95-126, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Radford, Andrew (1990) *A Syntactic Theory and the Acquisition of English Syntax*. Blackwell, Oxford.
- Radford, Andrew (1996) "Towards a Structure Building Model of Acquisition," *Generative Perspectives on Language Acquisition*, 43-90. John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Rispoli, Matthew (1994) "Pronoun Case Overextensions and Paradigm Building," *Journal of Child Language* 21. 157-172.
- Rispoli, Matthew (1999) "Case and Agreement in Language Development," *Journal of Child Language* 26. 357-372.
- Rizzi, Luigi (1993/1994) "Some Notes on Linguistic Theory and Language Development: The Case of Root Infinitives," *Language Acquisition* 3. 371-393.
- 斎藤衛 (2013) 「日本語文法を特徴づけるパラメーター再考」 『言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約: 日本語獲得に基づく実証的研究 成果報告書 II』 1-30, 国立国語研究所, 東京.
- Saito, Mamoru (2016) "(A) Case for Labeling: Labeling in Languages without  $\phi$ -

- feature Agreement,” *The Linguistic Review* 33.1. 129-176.
- Sano, Tetsuya (1995) *Roots in language acquisition: A comparative study of Japanese and European languages*. UCLA dissertation, Los Angeles.
- Sawada, Naoko, Keiko Murasugi and Chisato Fuji (2010) “A Theoretical Account for the ‘Erroneous’ Genitive Subjects in Child Japanese and the Specification of Tense,” *BUCLD 34 Proceedings Supplement*.  
[http://www.bu.edu/linguistics/BUCLD/Supp34/Sawada\\_Naoko.pdf](http://www.bu.edu/linguistics/BUCLD/Supp34/Sawada_Naoko.pdf)
- Schütze, Carson, T. and Kenneth Wexler (1996) “Subject Case Licensing and English Root Infinitives,” *BUCLD 20*, 670-681. Cascadilla Press, Somerville, MA.
- Takita, Kensuke (in press) “Labeling for Linearization,” *The Linguistic Review*, De Gruyter, Berlin.
- Weissenborn, Jürgen (1990) “Null Subjects in Early Grammars: Implications for Parameter Setting Theories,” *Theoretical issues in language acquisition*, 269-299. Lawrence Erlbaum, Hillsdale, NJ.
- Wexler, Kenneth (1994) “Finiteness and Head movement in Early Child Grammars,” *Verb movement*, 305-350. Cambridge University Press, Cambridge, UK.
- Wexler, Kenneth (1996) “The Development of Inflection in a Biologically Based Theory of Language Acquisition,” *Toward a Genetics of Language*, 305-350. Cambridge University Press, Cambridge, UK.
- Wexler, Kenneth (1998) “Very Early Parameter Setting and the Unique Checking Constraint: A New Explanation of the Optional Infinitive Stage,” *Lingua* 106. 23-79.